

知能情報システム工学実験1A ～シェルスクリプト～

山田 浩史

hiroshiy@cc.tuat.ac.jp

本実験の目的

- シェルスクリプトの理解を通じて、煩雑で面倒な処理を手軽に行う術を身につける
 - 既存コマンドの組み合わせ方を知ること、生産性を向上させる(楽をする)
 - スクリプト言語, 正規表現を組み合わせることにより高度な処理が簡単にできる
- ※ Linux 上で課題をこなすことを推奨します
 - WSL(Windows Subsystem for Linux)やMinGW, Mac 上でもオッケーです

内容

- シェルスクリプトを知る
 - シェルスクリプトはどう書けばよいのか？
- シェルスクリプトを使った例を見る
 - シェルスクリプトはどんなことができるのか？

Why シェルスクリプト？

- 体得するには十分な素養がある
 - C 言語が(ある程度)使えれば、容易に使うことができる
- 本実験で学んだことを最大限に活かすことができる
 - スクリプト言語と正規表現
 - これらのありがたみ・嬉しさ・位置づけを理解する
- 今後の作業効率に大きく影響する
 - 知っているのと知らないのとでは雲泥の差

プログラミング言語の選択

- 用途に応じて使い分ける必要がある
 - トレードオフが存在する
 - 粗粒度 v.s. 細粒度, 手軽さ v.s. 煩雑さ, 敷居低 v.s. 敷居高, etc...
- 今日は左末端のシェルスクリプトに触れる

シェル
スクリプト

Python, Ruby,
Perl, ...
(スクリプト言語)

Java, ...

C, C++, Rust, ...

アセンブリ
言語

指示できる処理の
粒度が荒い

ライブラリが抱負で
処理が手軽に記述できる

コンピュータの知識は
そこまでいらない

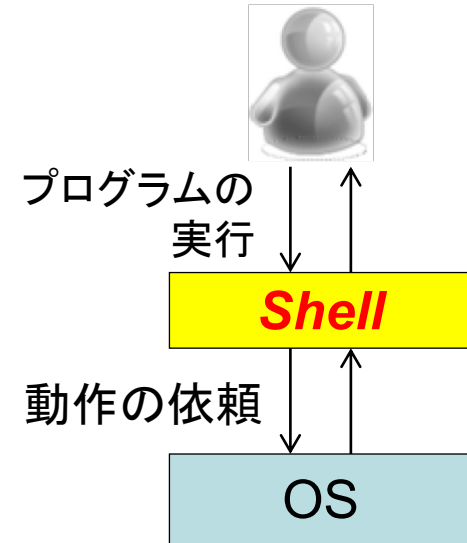
指示できる処理の
粒度が細かい

細かいところから
記述しないといけない

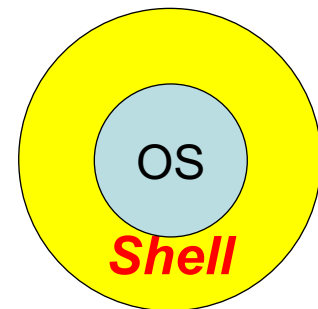
コンピュータへの
深い知識が必須

シェルスクリプトとは？

- シェル上でのコマンドをまとめて記述したもの
 - シェルとは: OS とユーザの仲介役
 - コマンドを通して OS に操作を対話的に依頼
 - ターミナル上にはシェルが起動している
 - シェルの種類も様々
 - 今回は bash と tcsh に注目する



- **入力してはたらい**処理をまとめることができる
 - 1,000 個のファイルの中から 1 KB 以上のものだけ CVS 形式に変換する
 - レポートとして提出されたプログラムをコンパイル・実行し、エディタが起動する
 - など



ユーザと OS との間に
殻(shell)のように介在

シェルスクリプトを作るには

- 他のプログラミング言語同様、文法に従って記述すればよい
 - 変数や繰り返し文、if 文などがある
 - シェルの種類によって多少文法が異なる
 - e.g.) bash v.s. tcsh
 - 原則、スペースを入れずに記述する

```
#!/bin/bash
```

```
COLOR=purple  
DATE=`date`
```

```
#!/bin/tcsh
```

```
set COLOR=purple  
set DATE=`date`
```

- コマンドを扱うならではの機能がある
 - リダイレクト、パイプ、コマンドの制御

リダイレクトとパイプ

- リダイレクト
 - コマンドへの入出力にファイルを介在させる
 - `cat -n test.c > test-n.txt`
 - `sort < word.txt > word-sorted.txt`
 - コマンド自身がファイルへの入出力をサポートしなくてよい
- パイプ
 - コマンドの出力を別のコマンドへの入力にす
 - `ls -al | grep txt`
 - `ps axu | grep yamada | grep test`
 - コマンド同士を組み合わせることが可能に

シェルがこれらの機能をどう実装しているかは 3 年生で

コマンドの制御

- コマンドの挙動に応じて、次に実行するコマンドを指定できる
 - mkdir foo && mkdir foo/bar
 - mkdir foo || mkdir bar
- コマンドを一つとして扱うことができる
 - (cd \${HOME}/work; ls -al | grep drw)
 - > work_dir.txt
 - \$HOME: ホームディレクトリを指す環境変数
 - 環境変数: 実行環境を表す変数

シェルスクリプトを使ってみよう

- シェルスクリプト: 人手ではたるい処理をまとめてやってくれる
- Case Study: プログラムの挙動解析
 - GOAL: grep の資源使用量を計測して、gnuplot でグラフ化する
 - 手でやるといかにもだるそう
 - grep を動作させて瞬間に監視プログラムを起動
 - 監視プログラムのログを gnuplot がわかる形に変換
 - もちろん失敗したら一からやり直し
 - 実験に失敗はつきもの
 - ときには数回とる必要もあり

シェルスクリプトを使えばいい！

- 手順としては・・・
 - 1. grep の資源使用率を計測する
 - CPU 使用率は top を, ディスクアクセス量は vmstat を使う
 - 2. 両者の出力から gnuplot 形式に変換する
 - 3. gnuplot に変換後のデータを与えて完了!
- 1., 2., をスクリプト化しておけばよい
 - スクリプト化すればほぼ全自動
 - 実験はコンピュータに任せればいい

というわけでスクリプト化

- まずは 1. をスクリプト化
 - コマンドの実行を伴うのでシェルスクリプトを使う
 - 資源監視コマンドの出力はリダイレクトでファイルへ
 - あとで gnuplot 用のデータに変換するために

```
1 #!/bin/bash
2
3 # main
4 top -b -d 1 > cpu_usage.log &
5 vmstat 1 > disk_usage.log &
6 grep -r linux /usr/src/linux/ > /dev/null 2>&1 && pkill top; pkill vmstat; echo "fin"
7
```

ログを gnuplot 形式にしよう

- Python スクリプトで記述することに

```
1 #!/usr/bin/python
2
3 import sys, re
4
5 cpu_pos = 8
6
7 pt = re.compile("grep")
8
9 def cpu2gnup(filename):
10     f = open(filename)
11     count = 0
12
13     for line in f.readlines():
14         obj = pt.search(line)
15         if (obj):
16             ln = line.split()
17             print "%d\t%s" % (count, ln[cpu_pos])
18             count = count + 1
19     print "%d\t0" % count
20
21 # main
22 cpu2gnup(sys.argv[1])
```

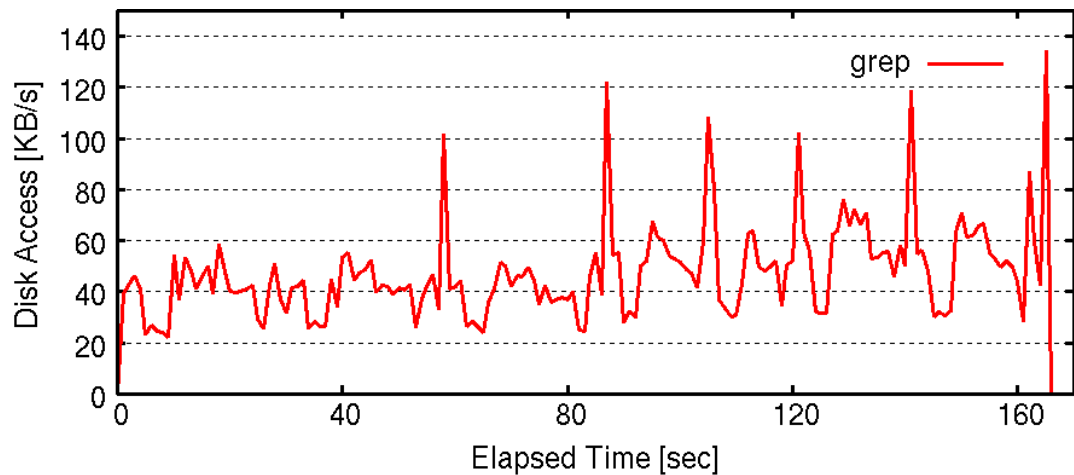
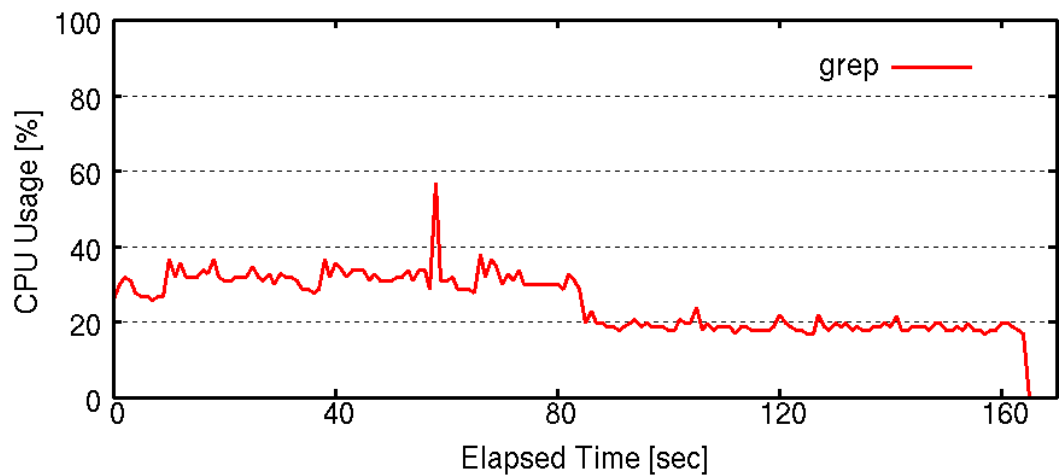
cpu2gnup.py

```
1 #!/usr/bin/python
2
3 import sys
4
5 data_list_len = 17
6 disk_in_pos = 8
7
8 def disk2gnup(filename):
9     f = open(filename)
10     count = 0
11
12     for line in f.readlines():
13         ln = line.split()
14         if (len(ln) == data_list_len):
15             if (ln[disk_in_pos].isdigit()):
16                 print "%d\t%f" % \
17                     (count, float(ln[disk_in_pos])/1024.0)
18                 count = count + 1
19     print "%d\t0" % count
20
21 # main
22 disk2gnup(sys.argv[1])
```

disk2gnup.py

完了!

- gnuplot に与えれば完了



もちろんスクリプト化は 一通りではない

- 個人が利用しやすいコマンド,
スクリプト言語を使うのがベスト
 - 先の例は Python を使わなくても
スクリプト化は可能
 - awk コマンドを利用するなど
 - 個人的に awk はあんまりオススメしないですが
- 大事なのは、少しの手間で、多くの
作業をコンピュータにさせてしまうこと!

レポートについて(1/3)

- 課題1～4 に取り組んでレポートにまとめる
- 締切: 12/06(水) 0:00 (12/05(火) 24:00)
- 提出先: レポート投函システム
 - PDF 形式で提出してください
 - ファイル名は“学籍番号 8 桁数字_名字(ローマ字)”
 - 例: 10268039 の寺田くん => 10268039_terada

レポートについて(2/3)

- 課題の解答だけを書いてください
 - 問題文は書かなくてよいです
- 原理は不要です
- プログラムの設計の心, 実行結果は記述すること
 - 設計の心: どうしてそのようにプログラムを作ったのか
- 無駄な考察は不要です. 考察が必要な場合は明記します.

レポートについて(3/3)

- (希望者のみ)レポートフィードバックをします
 - レポートに対して山田がコメントを返します
 - レポートの書き方を洗練したい人, 書き方を学びたい人にオススメ
 - 設計の書き方はこれでよいのか
 - 実行結果の示し方はこれでよいのか
 - そもそもレポートはこのような書き方でよいのか
- 対象: 課題3
- 希望者は Google Classroom のフォームにお名前をご登録ください
 - レポートで気になる点がありましたらレポート末尾にご記載ください. お答えします.